

朝のホームルームで配られたお弁当を、前の席の武田君はもう開けようとしている。今は3時間目。早過ぎないか？

武田君は教科書で壁を作り、先生から見えないようにするも蓋を開けると磯の香りが漂ってくる。

その香りにクラスの皆が首を動かした。当然、先生も気付かないわけがない。

だけど武田君はそんな事お構いなしで、お箸に釣り糸を取り付けるとそれをお弁当箱の中に垂らし、授業そっちのけで楽しそうに竿を動かし続ける。

その態度に、先生は我慢の限界だと言わんばかりに声を上げた。

「武田！釣り糸は垂らしたら動かすな！それじゃ魚が食いつかない！それと吉川！さっきから箸が引いているぞ！釣り糸を垂らしたら授業より釣りに集中しなさい！」

先生の注意に武田君はびくりとし、箸の動きを止めた。吉川さんは急いで糸を巻き上げる。

まさかあの真面目な吉川さんまで早弁するとは驚きだ。武田君のお弁当の磯の香りが強すぎて、吉川さんのお弁当には全く気付けなかった。

皆が見つめる中、吉川さんは慎重に箸を持ち上げ、お弁当箱から立派な鯛を釣り上げた。

「吉川！見事な釣果だ！」

先生が吉川さんを褒め、私達は拍手を送る。

吉川さんの今日のお昼はお刺身かな？鯛めしかな？骨をしっかりと煮込んだら汁も美味しんだよね…

「でも、まだ授業中だからな。それはリリースしなさい」

先生の一言に皆の笑顔が凍り付く。吉川さんなんて陸に打ち上げられた魚みたく口をパクパクさせている。

しかし言い返そうにも早弁した引け目があるのだろう。

目に涙を浮かべながら、残念そうに鯛をお弁当箱の中へと戻した。

授業が終わると皆が吉川さんのもとに集まる。

「凄かったね」「残念だったな」「大丈夫だよ」「お弁当の授業で取り返そう」

皆の励ましに、目をぬぐった吉川さんは「今度はもっと凄い大物を釣り上げてみせるよ」と笑った。

ちらりと武田君を見てみるとお箸の先に熊手を取り付け、重箱の隅をつつくようにアサリやシジミを取っていた。何も釣れなかったからか、釣りに飽きてしまったようだ。

武田君、凄い量のアサリやシジミを捕まえているけど、一体どうやって運ぶつもりだろう？ 凄く楽しそうだけどその量、一人で運ぶの難しいよ。

「頼む！手伝ってくれ！」

皆がため息を吐いた。やれやれと言いながらも他のクラスからバケツを借りてきて、皆で調理室へと貝を運ぶ。

そして皆、遅刻した。

4時間目、お弁当の授業が始まる。
皆、席に着くとすぐにお弁当箱を開く。

”何が出るか分からない海の幸弁当”を選んだ皆が集まるエリアは潮の香りで満ちている。目を閉じ、深呼吸をすると海にいる気分になってくる。

皆、お箸に釣り糸を取り付けてはお弁当箱の中に垂らし、じっと魚が釣れるのを待っている。その姿は釣り堀のようだ。

吉川さんを見れば、ご飯にふりかけを使用するかのように撒き餌までしていた。

本気の吉川さんに『頑張れ』と心の中で応援を送り、私も席に着くとお弁当を開ける。

“何が出るか分からない山の幸弁当”は蓋を開けると森の新鮮な空気が漂ってくる。

まずは一度深く深呼吸。マイナスイオンを存分に堪能した。

今回は山の幸弁当を選んで正解かな？

実は私、前回のお弁当の授業では海の幸弁当を選んでいた。

その日の為に釣りの本まで読んだにもかかわらず、何も釣れなかった。

あの時の苦い思いがあるからこそ、私は武田君や吉川さんの気持ちがよく分かる。

お弁当の時間は1時間。その間に海の幸弁当から魚を釣るのは本当に難しい。早弁も頷ける。

あの時は結局、友達から大量に釣れたからと鯖を譲ってもらった。

それで作った鯖寿司はワサビが効いたのか、思わず涙が出てしまった。私の辛い記憶である。

だから私は今回、山の幸弁当を選んだ。そして今回、私も早弁をしていた。

海の幸弁当だと早弁にはクーラーボックスが必要となる。

しかし山の幸弁当だとその必要はない。タケノコやキノコは適当な袋に詰めておける。

私と友人は1時間目の休み時間からこっそりとお弁当箱を開けてはお箸の先にシヤベルや熊手を取り付け、山の幸を掘り起こしていた。

友人は早々に栗を収穫していた。お箸の先に枝切り鋏を取り付け、柿を取っていた。

栗ご飯：デザートに柿：想像すると朝ご飯を食べたばかりなのについてお腹が鳴ってしま

う。
私は私で山の幸弁当から大きな松茸を見つける事が出来た。今日のお昼は豪華な松茸ご飯が食べられると密かな優越感に浸っている。

なので私達にとってお弁当の授業は消化試合みたいなものだ。お弁当箱を開けたものの、適当に箸でつつくばかりでおしゃべりに乗っていた。

「皆！手を貸して！」

突然、吉川さんが大声を上げた。

吉川さんのお箸を見ると折れるんじゃないかってくらい大きくくしゃんしている。

「大物！一人じゃ無理！お願い！手伝って！」

武田君がすぐさま助けに入った。吉川さんのお箸を握り、ぐっと力を入れる。それでもまだ足りない。

海の幸エリアの皆がお箸を置き、吉川さんの助けに入る。私と友人もお喋りを止めて吉川さんに駆け寄った。

「お前達はこれを頼む！」

そう言っただけ渡されたのはロープだ。ロープの先は吉川さんのお箸に繋がっている。

私と友人はそれを握ると全力で引っ張る。けどロープはびくともしない。

凄い力だ！気を抜けば、私達がお弁当箱の中に吸い込まれてしまう！

手を離してしまいたい。でも吉川さんの頑張りを見かねて助けてほしい！

「諦めるな！皆で釣り上げるぞ！」

先生が音頭を取る。クラスの皆がロープを握り、「オーエス！オーエス！」と運動会さながらの空気を出す。皆、額に汗をにじませる。

ミシミシと音を立てる吉川さんのお箸。

もうこれまでか、と思ったその時だ！

お弁当箱の中から、巨大な魚が飛び出した。

それはズシンと音を立て床に叩きつけられる。

そのあまりの大きさに私達が動けないでいると、先生が素早く魚に駆け寄り、止めを刺した。

「吉川！本当に良くやった！まさかマグロを釣り上げるとは思わなかったぞ！」

これがマグロ？

初めて生で見るそれに皆、ただただ「凄い」って言葉しか出てこなかった。

「このサイズだと100キロはありそうだな。先生もこんなに大きなマグロを生で見たのは初めてだ！」

確かに、これでお寿司を作ったらいいって何人前になるんだろう？

そもそも、こんな大きな魚がどうやってたらあのお弁当箱から出て来たんだろう？

お弁当箱って、やっぱり不思議だ。

「先生！テレビ局呼ぼうぜ！こんなに凄いのは、絶対ニュースになるよ！」

武田君の言葉に吉川さんが顔を真っ赤にして「だ、だめだよ！」と否定する。

「何でだよ？これって凄い事なんだぜ。絶対新聞とかにも載るって！」

はしゃぐ武田君に困り顔の吉川さん。

確かにこれはニュースになってもおかしくない大きさだ。

「武田。残念だがこれくらいじゃニュースにならないぞ。マグロは年に1度は他の学校でも釣り上げられているからな」

先生の言葉に武田君は肩を落とした。

吉川さんはホッとした表情を浮かべていた。

「それに、テレビ局を呼ぶのなら、これくらい釣り上げないと」

そう言っただけで先生が見せてきたのは3〜40年くらい昔の新聞だ。

そこには海の幸弁当からクジラを釣り上げた生徒の記事が載っていた。

「これ、先生が君達くらいの歳に釣り上げたんだぞ」

そう言っただけで自慢げに話す先生に皆、驚きを隠せない。

そんな中ただ一人、吉川さんだけは先生に闘志を燃やしているように見えた。

これは次のお弁当の時間も荒れるかも…